

## 坂の上の雲を越えて

東京電力株式会社  
常務取締役 武井 優



昨年末から放送されている NHK スペシャルドラマ「坂の上の雲」が面白い。「まことに小さな国が、開化期をむかえようとしている。」という一節から始まる本作品は、日清、日露戦争において活躍した秋山兄弟及び俳諧の革新に挑んだ正岡子規を中心に、明治という近代日本の変革期を描いている。

当時の日本は、ヨーロッパ諸国に文明国として認めってもらうため必死だった。ちょんまげを切って、牛鍋を食べ、鹿鳴館でダンスを踊った。また、ドイツを参考に明治憲法を制定し、西洋式軍隊を創設して、日清、日露戦争という困難を乗り越えた。

私の専門である会計の世界でも、この国家草創期と同様の事態となっているといえなくもない。これまで日本は、自国の会計制度がヨーロッパを中心に使われている国際財務報告基準（IFRS）と同等と認められるように、企業の経営実態、商慣行、会計実務を考慮しながらコンバージェンス（収斂）を行ってきた。それが今、IFRS のフルアドプション（完全移行）を検討する段階になっている。企業を測定するモノサシが変わることによって、売り上げが半減したり、利益が大幅に変動するような企業がでてくるともいわれている。私が経理実務を担当していた頃には、想像もつかなかった変革がここ数年で起こっている。

坂の上の雲では、明治の人々が変革の時代を乗り切っていく様子を、様々な角度から描いているのだが、私は原作に書かれている「個人の栄達が国家の利益に合致するという点でたれひとり疑わぬ時代」という一節に特に興味を持った。明治政府は近代国家設立のため、近代的な国民を育てる必要があり、教育の普及に力を入れた。身分制度を廃止して、勉学に励めば誰でも将来活躍できるようにした。そして、この時代の青年達もそうなることを望んでいた。現に、主人公の秋山真之や正岡子規は、立身出世を夢見て松山から東京に出てきたのである。

このことは現代のビジネスでも参考になる。企業が変化のめまぐるしいこの時代を乗り切っていくためには、社員に、持てる力を存分に発揮してもらうことが必要だ。そのために、経営層は社員が成長し活躍できる場を整え、生き生きと仕事を行えるようにしなければならない。

司馬遼太郎は、近代国家を「坂の上の一朶（いちだ）の白い雲」と表現した。坂道は険しいが、先駆者がいた分、道に迷うことはないであろう。しかし、雲に手が届いたら、そこから先は自分で道を切り開いていかなければならない。新しい道を開拓していく勇氣と知恵を持って、貢献してくれる社員を育てた企業が、変革を乗り越えて大きく成長していく。